

聲明とインドの音楽

仏教の発祥地である古代インドの経典詠唱に源をもつ仏教音楽、聲明（しょうみょう）は、中国、朝鮮半島を経て日本に招来され、日本の伝統音楽に大きな影響を与えつつ今日に至っている。現代まで生き続けてきた世界最古の音楽は、鍛えられた僧侶の声による倍音の圧倒的響きとその独特の濃密で美しい音楽空間を生み出す。

今回のゲスト、<七聲会>は、HIROSとともにこれまで国内はもとよりヨーロッパで50を超える舞台公演を行ってきた浄土宗僧侶のグループである。

まず、ヨーロッパの聴衆を魅了した彼らの声による独特の音楽にひたってみよう。また、聲明の音楽構造を知り、日本の伝統音楽の特徴と魅力を再発見しよう。さらに、やはり古代インドに端を発するインドの古典音楽を聴き、その違いと共通性を体感してみよう。

そして、結成以来重ねられてきた<七聲会>とバーンスリーによる即興的和奏の試みで、アジアの音楽アンサンブルの一つの可能性を感じてみよう。



出演者プロフィール

ゲスト：七聲会（浄土宗聲明グループ）

七聲会（しちせいかい）は、浄土宗総本山知恩院式衆を中心とする僧侶グループ。聲明、法要、儀式を研究し、舞台公演を行っている。

ジーベック・ホール（神戸）でのコンサート（アジアの音楽シリーズ「浄土礼讃とインド音楽」「聲明源流」）、国際サイコソノロジー学会神戸大会などでインド音楽と共演。1996年「アーツ・コラボレーション・プログラム」（愛知芸文センター）で現代舞踊、現代音楽と共演。

2000年および2003年イギリス公演ツアー、2004年フランス公演ツアー（以上、国際交流基金派遣事業）、2004年および2008年イギリス公演ツアー、2009年オランダ・ベルギー・オーストリア公演ツアー（文化庁支援事業）など、海外公演活動も積極的にしている。



2001年『聲明源流』、2009年『天下和順 PEACE ON EARTH』（ともにMFSレーベル）CDをリリース。

1枚目のCD『聲明源流』に未収録の聲明が加わった待望の七聲会の第2弾CD『天下和順』、好評発売中!!
2,500円。

<問い合わせ> <http://sound.jp/tengaku>



Hiros: 中川 博志（バーンスリー）

1950年、山形県生まれ。1981年～1984年インドのベナレス・ヒन्दウー大学音楽学部楽理科に留学。インド音楽理論を研究。大学のかたわら、バーンスリー（横笛）、ヴォーカルを習う。

現在、インドのバドマ・ブーシヤン（蓮化院、人間道堂）受賞者、バンドレット・ハリプラサード・チャウラ・スィヤークーにバーンスリーを師事している。帰国後、演奏会の企画制作、インド音楽理論書の翻訳出版などを通してアジア各国及び日本のパフォーミングアーツ紹介の活動を続けている。訳書『インド音楽概説』は日本語で出版されている唯一のインド音楽理論書。
<ホームページ> <http://sound.jp/tengaku/>



田中 りこ（タブラー）

1989年インド各地を旅行中にインド古典音楽の演奏に触れ、とりわけ打楽器タブラーの豊かな音色と表現力に魅せられ、学び始める。

1995年再びインドのカルカッタに渡り、タブラー演奏家オビジット・ベナルジーに師事。

現在は関西を拠点に、ホールや社寺など各地でインド音楽を中心とした演奏活動を行っている。そのほかテレビ・ラジオ出演、海外での公演、他ジャンルのCD作品に参加など、様々な活動を行っている。

インド音楽のレンズを通して見えてくる アジアの音楽の可能性 企画趣旨

われわれのまわりには西洋のハーモニー（和音）を基本としたパッケージ化した消費音楽があふれている。コードの組み合わせから簡単な曲を作るテレビ番組もある。しかし、そうした「普通」のやり方とは違った音楽を創造するシステムは世界中にある。

とくにインドの音楽は、コードをまったく使わずにいかに変化に富んだ即興的メロディーを作り出すか、という考え方に基いて緻密なシステムを作り上げ、豊かな音楽文化を誇ってきた。このインドの音楽システムは、日本や他のアジアの音楽の理解や、西洋のやり方とは違った音楽の創造に非常に有効なのではないか。

シリーズでは、こうしたインドの音楽システムに基づく即興音楽のあり方の理解と、アジアを中心とした音楽を演奏する優れた音楽家をゲストに迎えてオルタナティブな音楽の可能性を提案していくことを目的としている。

これからの予定

第四回 11月21日（土）「自然倍音によるホーミーとインドの音階」

ゲスト：岡林 立哉（ホーミー演奏家）

ホーミー（喉歌）は実に不思議な響きがある。一度聞いたら忘れられない。いったい誰がいつ頃こんな演奏法を発明したのだろうか。古代の中国、ギリシア、インドなどでは、ある高さの音を基準に違った高さの音を固定しようとするさまざまな試みを行った。彼らが注目したのは、ある高さの音に同時に含まれる違った音、つまり倍音だった。そして弦や笛を使い、複雑な計算の末に1オクターブに配置すべき音高と音数を特定した。一方、ホーミーの驚くべき点は、複雑な計算も楽器もなしに、声に含まれる倍音を発見し、声の倍音成分をコントロールして旋律を演奏することだ。インドとモンゴルの音階の発見と応用のあり方を知ることは、音楽の根源を考えてみることでもある。



<岡林立哉 プロフィール>

名古屋出身、京都在住。日本におけるホーミー、馬頭琴演奏の第一人者。

98年、旅先のモンゴルでホーミーに出会いその魅力にとりつかれる。以後モンゴル行きをかきね、馬頭琴・ホーミーを習得。02年、ヨーロッパに渡り、各国でストリートを中心に音楽活動を開始。03年にはロンドンで1stアルバム「NOMAD」発表、初めてソロライブを行う。04年帰国までに、スウェーデン、ノルウェー、リトアニア、スコットランドの芸術祭、音楽祭などで演奏、カフェやライブハウスから教会や学校での演奏に至るまで、幅広い演奏活動を展開。帰国後はモンゴルの奥地を旅して遊牧民から学んだ多くの歌と、西モンゴルに伝わる神祕の歌声・ホーミー、そしてモンゴルのお話とともに送る贅沢な「生音コンサート」を展開中。ホーミーの宇宙的響き、馬頭琴の素朴さ、柔らかな、「音」そのものの持つ力を表現したステージは全国各地で好評を博している。

2ndCD「北緯48度 天の底」好評発売中。